

目が覚めると、そこは例年と変わらない氷のベッドの上だった。

体を優しく包み込む冷氣。水晶の天蓋を見つめていれば、自然と目は覚めていく。

来たのね、と呟いて起き上がった。肌が痛いくらいに感じるのは、冷たい風と白い雪の気配。

今年も幻想郷に冬がやって来た。

「今年はいつもとより少し早いのね」

洞窟の入り口から外の世界を眺めながら、私の呟きが木霊した。答えてくれる者はいない。

それも当然。冬眠ならぬ春夏秋眠をするのは私くらいだ。その間ずっとこの狭い洞窟の中、目を覚まさない私の傍に居る者なんているわけがない。

乾いた風が吹き、雪が幻想郷を白く染める冬の間だけ、私は眠りから覚めて幻想郷を彷徨う。

例えば、夜だけを支配する吸血鬼のような。例えば、山でしか生きられない天狗のような。

その制約の占める割合が、他の種族よりも少し多いだけと言う事。

同時にその「少し」は、私と他者との間にどうにも

ならない隔たりを作っているのだけれど。

夜を支配する吸血鬼は、太陽の世界では体を満足に動かす事もままならない。

山に生きる天狗は、一度天狗社会から外れてしまえば、もう天狗であって天狗でなくなってしまう。

それと同じだ。冬に生きると言う事は、冬に繋がれて生きるしかないと言う事。私がどれだけ他者を求めても、冬と言う名の鎖は私を他者と隔絶する。

楽しい時を過ごした者も、季節が一巡りする頃には私の事など殆ど覚えてはいない。それどころか、私が冬を呼び寄せていると勘違いして追い払おうとした者もいた。

「……来るのが早い分、終わりも早いのかしら」  
——どうして冬が終わらないんだ……っ！

——お前がいなければ、皆幸せでいられるのに！  
冬が来るたび、人々から投げかけられる罵声。

私は人を面白半分で殺しているわけでも、冬を呼んでいるわけでもないのに。冬の象徴と言うだけで、人は私を忌み嫌う。

別に好かれないわけではない。けれど悪意をぶつけられる度、私の心が軋み、悲鳴を上げるのは確かだ。私に叩きつけられる、純粹で理不尽な人々の悪意。

真つ黒な彼らの心も、雪が白く染めてくれれば良い。けれど雪は、心に沁みこむ前に溶けて消えてしまう。だから私は傷つかないように、自分だけの雪の世界に心を閉ざした。

冬が来るのは、冬の妖怪としての私には嬉しい事。冬が来るのは、レティ・ホワイトロックとしての私には辛い事。

そしてここ数年は、目が覚める度にこんな事を考えてばかりいる。

アイデンティティの板挟みにあつた私の心はとうに歪んで、いつしか誰かと関わりを持つ事も躊躇うようになつてしまつた。

白い化粧を施した幻想郷を一人で見て回る分には、誰かに辛い言葉を投げかけられる事も無い。毎年姿を変え自然の芸術を眺める事だけをしていれば、私は傷つかずにいられるのだ。

だからこの冬も、一人で寂しく冬を楽しむ。

「まるで——」

まるで雪の牢獄に閉じ込められているようだ、と思ふ時がある。

私が私である限り逃げられない、閉ざされた冬の世

界。いつ終わるともわからないこの世界で、私は孤独を楽しむ他無い。

## S

夕方の湖に吹く冷たい風を感じて、あたいは今年も冬が来ちやつた事を知つた。

今はまだ葉っぱも赤いし、雪も降ってない。

けれどあと何回か朝と夜を繰り返せば、もうみんな寒くて遊ぶのも嫌がるに決まつてる。

家の中でおとなしくしてるのなんてつまらないのに、寒いつつだけで誰も外に出ようとはしない。

「チルノちゃん、どうしたの？」

あたいがいきなり立ち止まつたから、大ちゃんは心配そうに声をかけてきた。

「ううん、なんでもない」

首を横に振つて、また並んで歩き出す。

全然どうつてことない時でも、ものすごく辛い時でも、大ちゃんはいつでもあたいを心配してくれる。

けれどあたいと違つて寒がりみたいだから、やっぱり冬は外に出たがらない。

「なんでもない……」

ほんとはわかつてる。冬はおとなしく家にいる方が